

「新しい女」の模範を示す詐欺師

ギルマン『ベニグナ・マキヤブヒヨリ』

山 口 三 シ 子

ギルマンの『ソフティーンズ・ウーマン』

シャーロット・パークインス・ギルマン（一八六〇～一九三五）は『ベニグナ・マキヤブヒヨリ』（『フォアランナーズ』第五巻、一九一四年）において、「新しい女」の模範を示す女詐欺師（ソフティーンズ・ウーマン）を描いている。女主公ベニグナの幼児期から二十一歳になるまでを記録するこの小説で、彼女は次つぎと詐欺（ソフティーンズ・ゲーム）を働く。おもに無力な女性を助けるためのゲームであり、そのゲームに駆りたてるのは、因習的な社会規範にとらわれない「新しい女」の思想である。深い洞察力をもつて他人を操り、女性のよりよき生き方を探るベニグナの行為をひじり、ギルマンは「新しい女」の模範を示している。

ヴィクトリア朝的「真の女らしさ」の規範から脱却した「新しい女」は、女性参政権運動の高まりを背景に、二十世紀への転換期に出現した。十九世紀のアメリカを席巻していた、女性を私的領域に押し留める考え方、世紀の終りには、公的領域で活動する新しいタイプの女性たちの出現によって搖り始めた。「新しい女（the New

Woman)」との用語じたこは、一八九四年頃に作りられたところ(マハローズ 一三〇)「新しい女」は、女性をもぐらの価値観が大変換を遂げつづつあつた時代の象徴であつ、フランス、イギリス経由で輸入されたばかりの「フーハー」「ズム」とこの語を、たちまち流行語にする原動力になつた(「シテ 一三〇)。

そのフーハー「ズムを、「全世界の女性の社会的めやめ」(「シテ 一四〇)と定義したギルマンは、當時の「新時代の女性」に向けて『女性と経済学』(一八九八年)を著した。ターゲットを明示してゐるせ、女性たちに「個人としての社会的責任」とともに「人類を作りだす者として、種族にとつての計りしれない重要性」を認識させたいと願つたためである。ギルマンは、この著作のなかで「新しい女」について語及し、「より正面で、勇敢で、強く健康で、優れた技術をもち、有能で、自由で、すべての面においてより人間的な」女性と定義してゐる。

ギルマンによれば、「男性中心の文化 (androcentric culture)」に強じられた「偽りの感傷主義、偽りの優美さ、偽りの謙虚さ」などを払拭し、一人の人間としての人格を確立した女性としている。社会で「人間の仕事」をする男性に家で「仕事する」として「自然な義務」としての社会的責任を果すように、より社会的責任を果すようにして男性同様「人間」となる女性である。自分の月刊誌『フォアランナー (The Forerunner)』に掲載した「女性の人間性」(一九一〇年一月号)と題したエッセイでは、「新しい女」は「徹頭徹尾人間である」と書いている。

「新しい女」のイメージは、当時急速な発展を遂げつづつあつたメトロイアによって流布した。新聞や雑誌には、「新しい女」についての論議があふれ(マシコーズ 一三〇)、アメリカ女性の快活さ、明朗さ、たくましさなどを強調する「眞や挿絵などが多く掲載された。といふ、チャールズ・ギブソンが描いたいわゆる「ギブソン・ガール」は、一八九〇年代『ライフ』誌に掲載されたのを皮切りに、新聞や雑誌の挿絵として人気を集め、「新しい女」のイメ

ージを広く漫透させる役割を果した。重い「ルセットやペチコートなどを脱ぎ捨て、ハイネックのフワウスに長いゆるやかなスカートといつ出立ちで、戸外で活動する女性を描いた絵は、世間の人びとに「新しい女」の出現を実感させた。

「ギブソン・ガール」は、「ゴルフの試合などで男性たちに引けをとらない」姿を示す一方、「その人生の目的は夫を捕まえる」とある「限界」を示す、といつ指摘もある（ラディック 七三）。大量移民の時代にあって、「純粹な『アングロ・サクソン民族が雜種化する脅威』に対する反動として人気を得た」という見方もされている（七三）。だが、自転車に乗つたり、スポーツに興じたりする「ギブソン・ガール」が、女性の生活に変化が起きたことを広く知らしめたことは間違いない。ギルマンは『経済学』で「ギブソン・ガール」を「新しい女」と呼び、「気高いタイプの女性を表象する」と述べて云ふ。

「新しい女」が出現する背景には、女子高等教育の充実とそれとともに社会進出の機会拡大がある（ラディック 七〇）。大学で学問を修めて医学や法学などの専門分野に進出する女性とともに、速記やタイプなどの技術をもつて働く女性も増え、家庭を女性の「適切な領域」とするこれまでの社会規範にとらわれない生き方をする女性が多くなった（アモンズ ハ一八三）。「近代女性史においてもっととも意義深い出来事」と歴史家が呼ぶ、白人中産階級女性の賃金労働への参入が急激に進み（ハ二）、自分に自信をもち、アメリカ社会における女性の地位に疑問を抱く女性が、飛躍的に増えたのである（ラディック 七〇）。

サラ・エヴァンズやルイ・ラドニックなどが指摘するように、「新しい女」の出現に女子大学が果した役割は大きい（一四七、七〇）。南北戦争後、あつついで設立された女子大学では、学問をすると生殖機能に害を及ぼすと

「この「因縁的な考え方」に異議を唱えた」女性たちが、「教師やクリスチヤンと深く愛情に満ちた絆を築いた」(ヴァンズ、一四七)。しかし社会学や文化人類学などの分野でパイオニアの役割を果す、「女子学生が男子学生同様の学問的水準と健康な身体を維持してこる」とを助け合しながら説明した」(ハーリック、七〇)。

彼女たちは「ジョンソンダーが社会的に構築されたのと申しますから」(ハーリック、七〇)であり、卒業後も、ヴィクトリア朝的男性中心の社会秩序に対抗して女性同士の結婚つを強めていった。半数ほどは独身で、おしゃれ結婚しても多くの子供をもたらす、拡大しつつあった女性の職業に参入する傾向を社会活動や政治運動を実践していった(ハーリック、一四七)。

「アシカーやスミスなどの中等大学では、ガルマンの『経済』なども、教科書として使われたといつて(佐藤四三)。女子高等教育の充実は、ガルマンが「の著作で田舎したよいな、社会的責任につての「新しい認識」を女性にもたらせる結果になつて、女性の公的領域への進出を確実に推進したのである。

ガルマンが『ベニッタ』で描くのは、このよひな高等教育を取仕る機会に恵まれた上流女性ではない。物語上では、牧師や医師など、高い教育を取仕て専門職に就く女性も登場させてこなが、中流の女性、「並みの教育」を受けてだけの少女が独学で技術や知識を身につけて、「新しい女」に成長するのである。父親が「一家の長」として権力をもつて中流家庭に育つた少女ベニッタが、母親や姉の立派を助けながら、血の立派を果す過程が描かれる。ガルマンが「人工的家庭」(The Man-Made Family)と呼ぶ「異性が作った(man-made)」「男性中心の(androcentric)」家庭が、男女平等の「自然な」家庭に改革される様子だが、改革を実行するベニッタの視点で記録されるところ。ハーリック・ハース・ゲームは、その改革を推し進める際の手である、そのゲームを打ねるのは、女性の

精神的・経済的自立を推進する「新しい女」の考え方である。

ベニグナは、血ひの人生を語ることで「新しい女」のマーカルを示す。ギルマンが、読者と等身大のヒロインをつづじて、新しい女性の生き方を示したことは、小説が『フオアランナー』に連載されたことを考えれば、不思議なことではない。この雑誌は、ギルマンが血ひの斬新な思想を広く啓蒙する目的で採算を度外視して発刊したものである。内容は、連載小説、連載エッセイ、短編小説、詩、書評、時局についての「メントなど多彩」であったが、ギルマンはそのすべてを一人で書いた。血ひのリブワークを「新しい考え方を鼓舞し、宣伝する」と（レイン2—163）と認識し、その目的を遂行するために自分の雑誌をつくづく、多様な文学形態を用いたのである。

同時代の作家メアリー・オースティンは、『フオアランナー』がつねに同じ内容を扱つていると批判している（シャーンホースト・ハ五）。ギルマンは、多様な文学形態に挑みながらも、オースティンが批判するとおり、たしかに一つのメッセージを伝え続けた。「すべての人間はその社会環境を作り変えることができる」（シャーン2—63）とこつめッセージである。『フオアランナー』に十二回にわたって連載された『ベニグナ』には、当然ながら、ギルマンのそのメッセージが深く投影されている。ベニグナがしかけのコンフィデンス・ゲームは、社会環境を作り変えるための速効手段である。少女に詐欺を働くことは、社会が変えられる「ことを「面白」へ描くことで、自分の「新しい考え方」を啓蒙しようとしたギルマンの戦略でもある。

本稿では、ベニグナを「新しい女」の模範を示す詐欺師ととりえ、その詐欺師像の分析を試みたい。小説が『フオアランナー』に掲載されたことをふまえ、ギルマンが既成の概念と異なる自分の考え方、いかに「コンフィデンス・ワーマンとしてのベニグナに託したかを明らかにしたい。

ベーグナ・マキヤガハコ・パハツィス・カーラン

ベーグナが詐欺師であるとするより、彼女が詐欺師である「マキヤガハコ」のほうよりも詐欺師である。ベーラト・マッケルリの「マックトガハコ（MacAvally）」が実力であるが、彼女は幼少期に「マキヤガハコ（Machiavelli）」を自分の姓として選ぶ。イタコトア人の祖母が、策略家として知られる政治家「マッコロ・マキヤガハコ」一族の直系であることを誇りに思つて、その外見は頭のトイトコトトイドを求める。ベーラト・マッケルリの外見を「スマートの外見」に外側に身につかなかつて、その内側でイタコアの有能な策略家として投射し、「人を操つて」人生を走る決意をする。マキヤガハコとい姓は、頭の存在理由をみただけで、確かに策略をおじいとして生き抜く決意である。いつも以前を使ひ分け、本来の自分を隠して他人を探ねるところがベーグナの特徴だ。詐欺師のものである。

ベーグナの詐欺師としての特徴は、「善良な悪人（a good villain）」となることへの決意に表れてこる。歴史上の策略家マキヤガハコにして、策略をめぐらすのではなく、ベーグナは、やのに想を「消極的で無抵抗の」善人を助けるために行つ。善人は「悪」といふが起つて、忍耐、辛抱、断念などの美德を行つすが、それでは事態の解決にはならない。ところのがベーグナの主張である。悪人が頭脳を駆使して事態を都合よく進展せしむる最終的には神の裁きがくだるのことを知り、彼女は「頭の切れる善人」などは、社会を改善して生き残れると教へる。悪人の頭脳をもつて策略を練り、善人の実利をはかるために詐欺を働く。ところのがベーグナの姿勢である。ベーグナが「悪」の頭脳で「善」を行つ決意をするのは、「変化をもたらす」ところの意図が強く働いてこられたためである。「子どもたちのかい革命を起す」必要を感じ、彼女はその社会環境を変えるために詐欺行為に及ぶ。「子ども

もだつて、自分たちの強さを認識したれば、多くのことを成し遂げられる」とこつ自説を、詐欺を働くことでも実証するのである。その根底には、田の前の現実を悉くして実益を得る、といつ徹底した実利主義があるのである。ベニグナにとって、「もつとも面白く、大きいゲームは生きること」であるが、その田には、「ほとんどの人がへたなプレー」と映る。彼女は、「無限に広がる」人生といつゲームを、「有り難い」「樂しく」プレーしたいと望むのである。ベニグナが働くもつとも大がかりな詐欺は、家族を救つためのものである。姉ベギーの駆け落ちを阻止するための詐欺と、母を救つために父を家から追いだすための詐欺である。ベニグナは「のいすれにおいても、人の心理を巧みに操る詐欺師の素養を發揮して成功をおさめる。十八歳の姉が不幸な結婚をするのを未然に防ぎ、母親を不幸な結婚生活から救出している。姉と母はいずれも一家の「王」として君臨する父によってその人生の方向を見失つが、ベニグナは、「女は王を探る」と心でわかる「やえ」「もつとも強」と信じ、それを現実に成し遂げる。子どもが起した革命は、女の手で家の「王」を退放してその権力を失墜させる革命となり、女の強さを実証する結果となる。

ベニグナは、その奇抜な発想力、即座の判断力、優れた演技力などをもつて姉を救つ。姉が不実な男性に人生を託すのをやめさせるために、彼女は二人の異なった女性に同時に変身する。姉の恋人に別の女性がいると確信する彼女は、姉が家出した夜、闇に紛れて、姉とその女性を同時に演じる。姉がかぶるよつにスカーフをかぶり、姉が呼ぶよつにその恋人に呼びかけ、ベニグナは彼に対し自分を姉だと思わせる。同時に、彼と自分が一緒にいるといふを姉にみせ、彼女には恋人が他の女性と一緒にいるよつに思わせる。姉はベニグナを抱擁する恋人の姿を彼の不実の証と受け止め、彼との駆け落ちを即座に断念していく。

ベニグナは、幼少時から、才劇を書き、演出し、演じることに優れた能力を示す。このよつたな能力は、姉の人生の一大事を救つことにおいても、同様に發揮される。一〇〇の名前をもち、「善良なる悪人」という真逆な要素を一人の人格のなかにもつベニグナにとって、社会という劇場で演じることは日常茶飯事となる。二人の人物を同時に演じるといつて意表をつく発想や、それを危機一髪の事態に実行するといつて当意即妙の判断力も、ベニグナのコンフイデンス・ワーマンとしての力量を証明する。

姉を救つ詐欺において、もう一つの重要な働きをするのは、ベニグナの洞察力である。彼女は、なぜ姉が軽率妄動に走るのかを分析したうえで、姉の心理を揺動する作戦を立てる。ギルマンは、短編「ピンクの帽子をかぶった少女」（『フォアランナー』一九一六年一月号）でも、人生の岐路に立つ無垢な娘が世間を知り抜いた第三者に救われるテーマを扱っている。同様のテーマをくり返し扱うのは、ギルマンが若い娘の教育に关心を抱いていた証であるが、物語としては、『ベニグナ』の方が説得力に富む。人生の選択を間違える娘の心理が、自らを「社会常識の神童」と呼ぶベニグナの視点で分析されているためである。

ベニグナの分析は、父親が絶対権力をもつ家庭における娘の不幸を厳しく指摘するものである。彼女は、姉が「金持ちの青才」の甘言に屈するのは、娘に因習的な生き方を強要する父親のせいだと考える。「娘の居場所は家庭にある」と盲信する父親が、娘の将来の夢を摘みとるために、娘は「手の早い」男性の罠に落ちたのだと主張する。

大学進学の希望やオペラ歌手になる夢も、女だといっただけで断念させられれば、娘は「いつも焦つて間違つた男性と結婚してしまつ」というのが、ベニグナの意見である。彼女は、「人生に楽しみも自由ももてない」姉が、「卑

劣る父親をもつたばかりに、その全人生を台無しにされる「状況を明らかにする。父親の権力から逃れたいがゆえに、単なる「刺激」を「恋」と思いこんでしまった姉の精神構造を分析して、父親中心の家庭における若い娘の窮状を訴える。

ベニグナは、刺激を恋と混同する姉を「愚か」と呼び、姉が夢みる駆け落ち後の生活設計の悲惨な結果を予測する。男性の甘言を鵜呑みにして、「決して頭を使わず」、読書や実体験によって学習しないこと、その「気楽さ」を讃美もある。だが、そのような姉の姿に「家庭の暴君」たる父親が施す教育のひずみが表れていると考え、姉を救つための詐欺を決行する。女性の「主要な魅力」として「イノセンス」を「必要条件」とする「男性中心の文化」が生みだした教育のひずみである。

ベニグナは、「手の早さ」という意味がわからぬ姉に恋人の不羨を悟らせるため、心理作戦を敢行する。姉の前で一芝居する前に、「さわめて抜け目がないやり方で」、その嫉妬心に火をつける。「愛していれば、どんなに貧乏でもかまわない」と思つてベニグナは、姉が恋人の金銭状態を自慢するのを聞き、その愛がほんものではないと確信する。だが、「ちょっとでも恋すれば、人は嫉妬深くなる」と考へ、「イヤーポリモット繊細」「姉の嫉妬心を駆りたてる。恋人の享樂的な生活について、無垢な姉の心」「注意深く毒を盛り始める」のである。

姉はやがて本心をみせはじめ、「男の人があんまりに女人を愛していれば、別の人なんか見向きもしないわ」と語つようになる。ベニグナが扮するのはその「別の女性」である。恋人が別の女性に関心をもつたらすべてを終りにする、と姉に言わせたアエド「別の女性」を演じ、姉に恋人の不羨を認識させてくる。ベニグナは、人の心を読み、その心を操つて、血の作戦を成功に導いてくる。

ベニグナの行為は、姉への善意に発したものにせよ、その人生に介入するものである。姉には、自分の人生を自分で選んで生きる権利があり、失敗から学ぶ権利もあるはずである。だがギルマンは、ベニグナが姉の幸せを心から望んでいるとこつ理由で、その行為を正当化している。人間の真虯を見抜くことができない社会性をそなえた妹が、世間知らずの姉を救つ唯一の手段として仕組んだコノフィデンス・ゲームとみなしている。

そればかりか、ベニグナのゲームは、男性が求める若て娘の「イノセンス」が、男性の女性支配に都合よいばかりで、当の女性には、「賢い夫選びの手段となりな」ことを敵しく告発する。ギルマンが『フォアランナー』に連載したエッセイ「男性中心の文化 (Our Androcentric Culture; or, The Man-Made World)」(一九〇九年十一月号～一九一〇年十一月号)で綴る所によれば、娘が「娘に迫る危険で察知できない」ような「イノセンス」のなかで育てられる「弊害を女性の視点で糾弾」している。

ベニグナが父親を家から追いだすために計画したゲームは、姉の場合の「いつ」に「善意」に発するものではない。家族の「主人」所有者「刑務所長」としてすべてを「命令し」「禁止する」父親を憎み、悪意をもって、その人生に介入してくる。実父に激しい怒りを抱く自分が、世間では「不自然な娘」とみなされる」とを認識しながらも、その権力を排除すべく、彼にゲームをしかける。家庭経済の担い手であることを笠に着て家族のついえに君臨し、酒を飲んでは言葉による暴力をくり返す「酷い父親」を「排除する」ためのゲームである。

「サルタンのように」「ふるまつ父の機嫌をとるために」「忍耐強く無駄な努力」を重ねてきた母が、ついに「幸いにも死ぬか、無情にも気が触れるか」とこつ瀕口際まで追つめられたとき、ベニグナは母親を救つために策略を練る。そこには、家長に奉仕する「家政婦の地位」から母親を解放し、あらたに、女性が人間として生かされる形

主的な家庭を作ることの決意がある。

「父親を排除する」ための詐欺では、ベニグナの「ソフィデンス・ウーマン」としての底力が發揮される。姉を救うための詐欺では、即座の判断力や発想の斬新さが功を奏すが、姉よりも一段と手強い父親をだますには、綿密な計画性が問われることとなる。ベニグナは、「簡単なことではない」と認識したついで、いかに父親を操るかに「すべての注意を集中する」そのよつた覚悟で決行するゲームは、ベニグナの詐欺師としての「本領」を發揮するものとなる。

ベニグナがとる戦略は、第一に、だまし相手と友好関係を築くことである。父親が「自然な娘」と考える、親に従属する「よい娘」を演じ、その仮面の下で、父親と「緊密な調和の関係」を築きあげようとする。父親を間近で観察してその最大の関心事が「科学や発明」であることを知ると、自分もその分野の勉強に力を注ぐ。「親は自分の性質が子どもに引き継がれることを好む」と信じ、父親を喜ばせるのが目的である。

機械工学や電気などに関する論文を読みあさりては父親に教えや忠告をINGC、彼がおしゃべりも優れてはいること実感できるようになり始め。ベニグナは、「すぐに聞かせ」説明に飽き、威張つて恩着せがましい態度をとる。父親の虚榮心をくすぐりながら、彼と「友好協定」を結ぶことに成功する。だます相手を知り抜き、その関心事をとおして相手の懐に入り込み、その信頼を勝りといつてこむ。伝統的ジェンダー概念をこころの能力を發揮して、女性蔑視が強い父親に、「女の子にしてはかなり頭がいい」と言わせるほど、その心を掴んでいる。

ベニグナが次にとる戦略は、だます相手の弱みにつけ込むことである。「本攻撃」と称して、父親の郷愁を募りせらるるヒーロー総力をあげる。故国スコットランドの歴史 小説 詩歌などを、彼よりも詳しく述べて勉強し、と

もに語り、読む時間を持つべく。音楽が得意な姉を説得して、夕食後には古ースコット・ラングの歌を歌わせ、家中を故郷の雰囲気で満たす。父親の聲線に触れる言動に徹して郷愁を募らせる。その想いが極限に達するといふに、故郷に旅立つきつかけを用意する。家で講読してくるスコット・ラングの週刊新聞に広告を出して、父親の目に触れるようになるわけである。「故アンドリュー・アンガス・マックアダウェリの最近親者が十日以内にヒーリングバラ市ブリッキー通り一〇九番地に血の出頭すれば、一家の利益になるでしょう」とこうしたのである。父親は十代の娘の想つ轟にはまって、即座にスコット・ラングに旅立つてこる。

ベニグナの詐欺の基本は、じの明敏な詐欺師にも共通するといふことではあるが、だます相手の欲するものを、はじよい時期に提供することである。ベニグナは、父親が故国での投機に関心をもつてこることを知り、渡航の機会を絶好のタイミングで用意したことになる。父親の信用を得て会話を交さなかで商売上の悩みを聞き、その情報を逆手にとりて、彼の胸に新しい商売の夢を抱かせる広告をだしたのである。海のかなたの新聞に広告をだすにあたっては、きわめて周到な手順を踏み、英國在住の友人なども有効に使ってこる。父親のホームシックを駆りたておき、大西洋を股にかけた煩雜な通信のやつとりを経て、ベニグナは父親を家から追いでだすことにして成功してこる。

ベニグナは詐欺を働きながらも、多くの場合、だます相手から金錢を奪うことを目的としていない。それどころか、父親に挑んだ詐欺では、新聞広告をだすにあたって、自分が苦労して貯めた虎の子までも使っている。物質的・金錢的利益をあげることに決して無関心なわけではなく、小学生のころには、教室用の地球儀や高い観劇料をだましとつたりもしている。だが、詐欺行為に及ぶ目的を、「あらゆる人を、あらゆる方法で、それと知られず」に助ける」とするベニグナは、物質的・金錢的利益をあげることに執着するのではない。

マキャヴェリのみならず、シトロ・マクベスやイアーノなどに自らをたとえ、人を操めることを信条としたながらも、その目的ははつねに弱者の利益のためにある。ベニグナの最大の関心事は、無力な女性たちの精神的・経済的自立を支援することであり、彼女にとって、金銭は他人から奪つものでなく、自分で働いて得るものである。彼女の「コンフィデンス・ゲームは、おもせに、女性の自己 および自立支援の妨げとなるものを排除する手段である。

「不自然な娘」の改革

ベニグナのコンフィデンス・ウーマンとしての役割は、ゲームに勝利したところで終りではない。彼女はたしかに、詐欺を働く過程で、男性が権力をもつ家庭でいかに女性の人権が侵害されているかを明らかにする。そうするとこと、作者の「社会批判の便利な道具」（クールマン二二）としての詐欺師の役割を果す。若い娘が家庭を「女性の適切な領域」と信じる父親にその人生の夢を摘みとられ、妻が夫のドメスティック・ヴァイオレンスで心身の破綻をきたすさまを告発する。だがベニグナの役割は、このように女性の窮状を告白することだけに留まらない。社会環境を作り変える「目的をもって」小説を書いたギルマンが創造した詐欺師には、「変化をもたらす」ための明確なヴィジョンを提示することしかも、より重要な役割となる。ベニグナは、家の暴君を追放することでき、姉や母を救ったのち、一人の独立した新生活まで計画し、彼女の革命は、女の生き方を変えるといひまで及ぶ。「女だって、自分たちの強さを認識してあれば、多くのことを成し遂げられる」とことを、新しい女性の生き方で実証する結果になる。

ベニグナは、自分の周りにいるどの女性の自立支援にも力を注ぐが、その最大の支援を母親に向ける。父親を家から追放したあと、母親の唯一の財産である家屋を活用して下宿屋を始め、そこには彼女の居場所を用意する。「黄色い壁紙」(『ニューイングランド・マガジン』一八九一年一月号)のヒロインのようになり、結婚生活の「檻」に捕われて、精神破壊の危険な淵をさまよっていた母親は、娘が始めた下宿屋商売のなかに病氣回復の機会を見いだす。下宿人に母親のよつた愛情を注ぐことから始め、最終的には、下宿屋運営の全責任を担つまでになり、「自分のお金を使ふことを楽しむ」ようになる。自分が家族以外の人間に役に立ち、それが金銭で評価されて血ひの生活を支える手段になることと、「家族の召使い」ではなく、「社会に奉仕する」臺ひを知るのである。

ベニグナが姉や母を動員して始めた下宿屋ビジネスは、たとえば「正直な女性」(『フォアフュンナー』一九一一年三月号)のヒロインのよう、ギルマンが創造した女性キャラクターには、しばしば経済的自立の便利な手段となる。自伝によれば、ギルマン自身も一時期従事したことのあるところの仕事を、無給の家事労働に従事していた女性たちにて、有給のプロフュッショナルな仕事をする絶好の機会を提供する。家事労働をビジネスとして「社会化」することと、女性が家庭の呪縛から解放され、その潜在能力が社会で生かされるところ(ギルマンの主張は、『ダイアンサがした』こと)(『フォアフュンナー』一九〇九年一月号~一九一〇年十一月号)などにより包括的に展開されている。ベニグナの母親が人生に活路をみいだすのも、その「社会化」の結果である。

ベニグナは母親が働きやすいように入念な援助を施すが、かつて「母親の人生は子どものなかにある」と公言していた母親は、自分の主婦としての経験や「母親の優しさ」溢れる性格を生かすキャラリアに人生の意義をみいだす。「四十歳でプロの祖母になる」人生を捨て、プロの仕事人として身を立てるのである。彼女は『経済学』における

ギルマンの言葉で言つ換えれば、社会とかかわる仕事に「自分の能力を行使する余地」をみつけ、その仕事が「自分の経済状況に影響を与える」ようになります。「人間生活においてつなに重要な要素であった母親としての労働力」を、「富を生みだすための力」とするのであります。

ギルマンは、中年女性が社会で活躍する話を、「未亡人の力」(『フォアランナー』一九一一年一四四)や「変化をもたらす」(同誌一九一一年十一月号)などで描いています。彼女たちは、夫や子どもに仕えてきた長年の生活から足をあらげ、主婦として家庭で培つた経験などを社会で活用して自分自身の独立した人生を歩む。ベニグナの母親も、これらの短編に描かれた中年女性同様、それまでの結婚生活では達成できなかつた個人としての社会生活を四十歳すぎて獲得する。家族の面倒をみてきた経験を生かすビジネスに生き甲斐をみいだすことと、「自信や希望や勇気をより強くもつようになつて」、「全体の視野を広め、輝かせて、より確かなものにしてこる。自分の足で立つこと」で、女性の居場所が家庭だけではなく、社会のあるべき形になることを証明していく。

ベニグナが母親の精神的・経済的自立を援助するのは、その不幸な結婚生活の原因が、夫の従属的地位に甘んじている母親自身にもあると考えてゐるためである。子どものころから両親の不平等な関係を見て育ち、理不尽な権力を行使する父親を憎むにいたるが、ベニグナは、父親がその暴君ぶりを加速させるのは、母親の不甲斐なさにもあると考へる。

だますために父親と友好関係を築き、間近でその生活を観察する過程で、彼女は家計の全責任を負わされる家長の苦しみを理解し、父親に同情すら寄せてはいる。社会と遮断された生活を嘗む家庭の主婦には、予想しがたい男の苦しみがある」と理解するのである。両親に対するベニグナの見解が正しかつたことは、父親が長く不在から戻

つたときに証明され、彼はキャリアをもつて独立した妻に畏敬の念を抱く。以前のような不遜な態度もとらなくなり、夫と異なる独自の意見をもつことを当然の権利だと宣言する妻を受け入れる。そればかりか、彼女を単に妻としてではなく、独自の長所をもつ個人として敬意を払い、誇りに思つよつになる。

ギルマンが家長の責任を強いられる男性に向同情的であったことは、「ピーブル氏の心臓」(『フォアランナー』一九一四年九月号)などによつても明らかである。『ベーグナ』と同時期に書いたこの短編で、ギルマンは、家中の女性を養つたために、自分の樂しみを犠牲にして働き続けた男の悲哀を描く。男であるといつ理由だけでそのよつな運命を強いられる主人公ピーブルに対し、ギルマンは分身ともいえる女性医師に「心臓肥大」という故意の誤診をさせ、残りの人生を自分のためだけに生きる機会を「与へて」いる。女性が男性に経済的依存するために、男性が自らの人生をまつとうべきない現実を、男性に思いを寄せと描いている。

家父長制社会における男性の苦惱を同様に描きながら、ギルマンは、ベーグナの父親には、ピーブルほどに同情をよせることはない。家父長制の最悪の產物のように描き、父親が娘たちの憎しみの対象になり、夫が妻の神経衰弱の原因になり得ることを示す。だが彼をふたたび妻のもとに戻し、自立を果した妻と夫婦関係を修復させてくることでも明らかなように、ギルマンは、彼もまた家父長制の被害者であるといつ姿勢を崩すことはない。家長の重責に耐えられずに吐く暴言に、泣き、震え、神経を消耗するだけの妻に苛立ち、さらに「ドメスティック・タイラント」としての「醜さ」を増す夫を描くことで、家父長制が、女性の人生ばかりでなく、男性の人生をも破壊する「ことを明らかにする。ギルマンは、夫の横暴とも妻の神経衰弱も、その主な原因は、夫と妻が同様」、夫が「王」で、妻はその「妾臣」であるべきところ、家父長制が生みだしたジェンダー概念とどうわれていたことにあると示す

唆す。

ベニグナは母親の自立を援助する」として、彼女が夫に従属することのない、新しい夫婦関係を築くことができるよう援助する。だがベニグナは、優れたキャリア・ワーマンを母親の家に下宿させることで、母親に異なった人生の選択もあることを示す。ベニグナが望んだ「アーティスト」母親は、牧師としてのキャリアに邁進する未婚の女性と初めて親しい友情関係を築き、結果として、女性は夫がいなくても幸せな家族生活を楽しむことができるのことを証明する。

一人の自立した女性は、それぞれの長所を最大限に生かして互いの短所を補い合って、異性愛よりも「より広遠な範囲の幸せ」の扉を開く。ギルマンは、このよつたな女性同士の深い繋びつきをとおして、「強制的異性愛」の呪縛からの解放を提案する。当時、とくに高学歴の女性のなかには、同性のパートナーと家庭生活を営む女性もあくまでも、ギルマン自身、一時期、女性記者と同居生活を送っている（アレン、四一）。ギルマンは、ハイドリマン・ロッチが半世紀以上ものちに主張する「（六三一、六〇）をすでに提唱し、実践してこた」とになら、この点でも「フオアランナー（先駆者）」であった。

ベニグナが見届ける姉の人生は、彼女自身をも含むあらゆる若い女性に共通する問題を提示する。女性がいかに社会的な責任を果しつつ、言に寄る男性を正確にみきわめて個人的な幸せを達成できるか、ところの問題である。ベニグナは、母親の自立のために始めた下宿屋経営で、姉にも活躍の場を用意し、会計など重要な仕事を任せせる。母親の弱点を補いつつで、姉を下宿屋ビジネスの要職に配置し、有能な男性下宿人に姉の援助をさせぬ。ベニグナは、この下宿人に、家の秘密から下宿屋経営の内情まで話して姉の援助を要請したことと、成

功する。一人が互いに兄弟、姉妹のよう協力して仕事を進める過程で愛情を抱くようになるためである。

「美しいゆえに多くの男性に言い寄られ、間違った男性と結婚する」危険に直面していた姉は、責任ある仕事で「より多くの給料を得る喜び」を感じるようになり、その仕事をつづじて、人生のよき伴侶ひ出合つ。かつて、手近な男性に頼ることで、父親の権力を逃れ、自分と母親の人生を立て直さうとした姉は、「自分自身のために仕事に興味をもつ「よつこなり」、「女性が愛し、仕事もできる」ところ、ギルマンが人生の「ゴールとして定めていた生活を志向する（ヒル一六）。

詐欺師のテクニックを用いて家族の人生に介入したベーネナは、その後両親と姉がそれぞれ独立した新しい人生を歩み始めるのを見届ける。彼女は自分の行為を「家族への義務」とどちらていても、彼女がもたらした変化は究極的には、家族間における人間関係の是正である。女性が男性の「所有物」として男性に忠誠をつくし、奉仕すべきものとしてみなされる男性中心の家庭を、女性の人権が保障される家庭に修正したことになる。ベーネナは、母親や姉が、男性同様「自分自身の金を稼ぎだす」「一人の人間として立つこと」で、男性と愛でむじづく共同関係を結ぶのみ援助している。母親と姉に「個人としての社会的責任」を眞實めさせ、いわば「新しい女」の生き方を促すことで、一人が自らの人権を守り、男性との平等な関係を築くのを見届けてくる。

ギルマンは、「男性中心の文化」の第一回連載「人工的家族」（『フォアランナー』一九〇九年十一月号）において、家庭の目的は「子どもの世話と養育にある」と述べている。「無力な幼き子どもを扶養し、守つ」「そうして人種を改良する」ところその見解には白人優越意識も垣間みえるが、ギルマンがこのエッセイで問題にするのは、家庭の目的を男性が変えてしまったところ」とである。「子どもに最上の奉仕を施すべき機関が、男性自身に奉仕し、

男性の慰め、権力、誇りを示す手段になつた」というのがギルマンの主張である。

「このよつな「男性が作った家庭」では、母親が社会の活動から遮断された「家政婦」といふ「劣つた」地位におかれるために、子どもは、「社会的遺伝形質を半分盗まれてゐる状態にある」と、ギルマンは言つ。ベニグナは、そのよつなハンドを背負つ子どもでありながら、並はずれた社会性を發揮してその環境を作り変えむ。「男性的要素が多すぎるために人間性が損なわれてゐる「父親独裁の家庭」、「父親と母親とが人間的に平等な通常の家庭」に改革し、娘が同様の家庭を築くよう援助してゐる。「子どもは親を批判する権利はない」という社会の教えに反する「不自然な娘」であることを自ら認識しながら、密かに家族を操つて、子どもの側から改革を挑んだことにある。

人権を侵害された少女から「新しい女」へ

ベニグナのコンフィデンス・ゲームは、家父長制社会における少女への人権侵害を跳ね返す手段としても機能している。ギルマンが子どもの養育に关心をもつていたことは、『子どもたちについで』（一九〇〇年）をはじめ、その著作の至るところで確認できる。『ベニグナ』においても、幼稚園教師になるべく勉強していく母親が、「子どもの文化」についての深い関心を示すが、父親はそれを「現代の病的な愚鈍」とのきわみとして退け、娘たちの幼稚園教育を阻むくだけが描かれている。子どもの養育で、ギルマンがとりわけ関心を示したのは、「従順であること」を要に据えた教育課程によつて子どもの人権が侵害されることがある。

『「子どもたがつて」と』でギルマンは、「服従する習慣が、感受性の強い子どもに強要されると、判断力や意志力を働かせること」ができるなくなる」と述べている。『ベニグナ』は、男性優越主義者の父親に服従を強いられる少女の人権侵害を告発する物語でもある。不服従のそりを免れる手段として、ベニグナがコンフィデンス・ウーマンの性格を形成し、やがては「新しい女」への道を辿ることで、不本意な服従を退ける過程が描かれる。

ベニグナは、親への不服従に対する「罰」を逃れる努力のなかで、コンフィデンス・ウーマンの基本的性格とも言つべき「重性」を身につける。父親に「奴隸」され、監房に入れられていくと感じた家庭で、彼女は「一重生活」じこじるか、「二重生活」すらしなければ生き残れないと悟る。「酷い父親」をもつ子どもの苦境を牧師に訴えて、服従の義務を諭されるばかりか、親を批判する子どもの「異常」を指摘される。

「三歳の子どもたつて良識をもつてこむ」と考えるベニグナは、子どもの尊厳に關心を払わない社会に対抗し、「奇妙な」「子ども」というをしつを免れるために本心を隠す。家庭でも、社会でも、子どもの人権が守られない状況から身を守るために、周囲が望む「ただの女の子」を演じることになる。ベニグナが本心を明らかにしないコンフィデンス・ウーマンの一重性を身につけるのは、たゞどんなに理不尽な親でも、子どもは服従しなければならないとこの社会理念のなかで、血の信念を賣き生き残るために苦肉の策でもある。

ベニグナは、「一重生活を嘗む」とじよつて、当然ながら深遠な内向世界をもつに至る。「子どもが犬か馬のよつにふるまつ」と考える父親が、「避けがたい事実」として立ちはだかる家で、彼女は何が起つたと黙つて聞き、觀察する習慣を身につける。「たくさんの人」を考へ、機が熟すまでに決して発言しなご、日常のなかで、彼女は幼くして人間についての深い洞察力を身につける。

同時に「自分の心にすばらしこ世界が開かれてる」とことを発見し、その世界に「足を踏み入れる。心深く」自由な世界をもちながら、外見的には「他人と変わらない人物のよつて見せかけ、誰にも悟られずにすばらしこ」とを成し遂げる」とこつ「野心」を抱くよつてなる。ベニグナの物語は、彼女の内的世界の自由な発露であり、その野心達成の痛快な記録である。

「ただの女の子」としての軋轢と鬭わなければならぬべーぐなにとって、その野心達成は、「伝統的ジョンダー概念をしえむ能力を血り養成する」とことによつて可能にならぬ。人気小説に登場する「天使のよつな娘」のよつて「酔っぱら」の父親を更生させて栄光的な死を迎える」とができるなどして、彼女は自分の苦境を有無なものにしてよう決意する。ギルマンは、「八十的家庭」における「親が子どもに悪影響を及ぼす」とを「罪」と呼んでいるが、ベニグナは、その罪が招く弊害を免れるために「人について学び、いかに人を操るか」を鍛錬する。

ベニグナの少女時代は、「父親を排除する」「コンファイデンス・ゲームを働く力をつけるまで、」の「人間操作術を練習」によって磨くことに費やされる。たとえば彼女は、「女は花を育てる頭も技術もない」と主張する父親をかわして、母親の希望する花壇を作りあげ、父親の偏見を覆す。別の機会には、娘は家にこるべきだと信じて疑わない父親の目を盗んで、遠方に住む祖父の家まで一人旅を決行する。このとき学んだ効率的な農場運営が、やがて挑むことになるトト屋経営の下地ともなり、ベニグナは、父親が望む「従順な女の子」であつたり得できない能力を養つてこる。

「酷い親」と屢々、自らの信頼を貰つたあと、ベニグナは、「強く、技術に優れ、自らが秘密兵器の「兵器庫」のようであつたこと願つ。その願いを達するために彼女がとる手段は、いかなる知識や技術も貪欲に吸収する」とじで

ある。その姿勢は、ジョンダー偏教育に対する現実的な態度にも表れる。男子には木工組工や金屬組工を教え、女子には料理と裁縫しか教えない学校教育に対し、彼女は当初、密かに怒りを表す。だが、やがては、そのよつな教育からでも得られる「利益」に目を向ける。「料理や裁縫によって頭脳の訓練ができる」と考へ、「こうこうできるようになれば、もつと強くなれる」ところから方をする。じこじこ、料理や裁縫は彼女の特技に加えられ、社会奉仕や仕事の幅を拡大するための強力な「秘密兵器」となる。

ジョンダー偏教育に柔軟に対処する一方、ベニグナは、その偏向を「える力を養つ努力も惜しまない」「もし女子に良識があつて、馬鹿な臆病ではないことがわかれれば、男子に軽蔑されない」と「伝統的に男子の特技とみなされる能力を開拓する」とにも力を尽くす。そのような能力を身につけることで、都合のよこ口実をもつけては、男女差別意識を正当化する人ひとの思い込みを覆す。

「心を傾けて専心すれば、なんでもできるよしななひ」をモットーに、ベニグナは、父親が禁止するダンスやスポーツ、タイプなどにも密かに挑戦する。その挑戦が発覚し、「お前は親の言つたことを聞かない」と叱責を受けて、不服従しないことを謝ることはない。必要な能力や技術が達成されないと、重要なところ、父親の叱責を問題にする」とはなし。彼女が謝るのは、父親に不愉快な思いをさせたことのみである。

アン・レインは「シャーロット・パークインス・ギルマンの文学的世界」において、ベニグナを「女性版ハック・フィン」(xxxii)と呼んでくる。ベニグナは、人生の悩みや疑問を読者に吐露しながら、社会をすり抜けて生き残ることにおいて、たしかにハックに似ていて、かつては、社会の欺瞞や虚偽を読者に意識させ、尖極的にはいかに「人間が互いに残酷になれるものか」を示すことにまで、ハックに共通する(山口一七〇〇九一)。

だが、ハックがそのよつた社会で成長するのを拒絶し、最終的には自然のなかに逃亡するのに対し、ベニグナはまったく異なった方向に向かつ。「人生の目的」を「成長する」といおき、あくまでも社会において責任を果すとする。彼女は、男性中心社会で少女としての生れにぐれを痛感しながらも、自分が「成長する」としての不便さを克服する。

じじつ、いかなる機会もとらえて自らの成長を心がけ、そつして蓄積した知識や技術を「世の中の不正をたたず」ために使う。ギルマンが描いた「女性版ハック・フィン」は、社会を改革する目的をもつて小説を書いた作者の意図を反映して、家父長制社会の「不正をたたず」には、少女や若い女性はいかにあるべきか、といつ模範を示していく。

模範としてのベニグナは、物語の終結部近くには成人に達し家を離れるが、広い世界をひとりで生き抜く力を示す。ギルマンは、もしベニグナが親を批判することもなく、従順なだけの子どもであつたら、もつことができなかつた力を備えていることを強調する。彼女が蓄積した知識や技術は、生まれ育った家庭を改革する「コンフィデンス・ス・ゲーム」の「秘密兵器」であるが、究極的には、彼女自身が社会で働くための確実な後ろ盾となる。それらは、男性に従属することなく、男性同様に社会的責任を担つ「新しい女」になるための「秘密兵器」となる。

二十一歳の彼女は、農場運営や下宿屋経営で培つたビジネス手腕から、独学で習得した速記、タイプなどの技術まで、「自分の経済状態に影響を及ぼすよつた仕事」に就く「卓越した仕事人」の能力をもつ。彼女の決意は「さらに大きく成長すること」であり、目標は、五十代にして、大学の学長、高級官僚、大起業家など、「きわめて高度な技術や知識が要求される難しい職業」に就くことである。ギルマンは、家を離れたベニグナにさまざまな職業を試

させ、労働者階級から有閑階級の世界までを覗かせて、「人生についての知識をじかに得る」機会を「」える。それは、フューリーズムを「女性の社会的めざめ」と定義したギルマンが、「新しい女」には必要と考えた社会的経験である。

ギルマンにとって、「新しい女」は「セックスの関係」によって経済的地位を築くことのない、「人間」である。ベニグナは、『経済学』におけるギルマンの主張を実践すべく、「社会に対し経済的関係をもち、「一人の人間として歓迎され、受け入れられる」よう努める。だが彼女は、コンフィデンス・ウーマンの策術を使わずに、社会で働くことができない。女性の「性的魅力」がその経済的地位を築く唯一の手段となつてゐる社会では、たゞえ男性同様の人間になるべく知識や技術を蓄えていても、それだけでは勝負できない。

ギルマンは、ベニグナが家庭にいたとき同様、コンフィデンス・ウーマンの策略を駆使しなければ社会的責任を果すことができない現実を描く」として、男性のみが人間と思われてゐる社会で、人間になろうとする「新しい女」の試練を示す。それは同時に、そのような社会での生き残り策を「新しい女」たる読者に教示する」とある。ベニグナが、広い男性社会で仕事をするために「コンフィデンス・ウーマンの術策を使わなければならぬのは、その「性的魅力」を隠すためである。「男性中心の文化」におけるギルマンの主張によれば、「男性が作った世界」では、「女性」にセックスのみを見て、人間性を見ない。そのような世界で女性が男性同様の経済的自立を果すためには、ベニグナのよつてその「性的魅力」を排除する必要がある。

ベニグナは、「舞台に立つ野心はない」と言しながらも、「より大きな社会じつつ劇場」でよりよく演づるために俳優の下で働くことを不可欠と考へる。そして、「若くみずみずしく、魅力がないとは言えない」顔立ちを隠す

ため、実際の年齢より老けてみえる化粧に興味を示す。ギルマンは、ベニグナのこのよつた興味をとおして、男性同様社会的責任を果す人間としての「新しい女」は、その責任を果す際に性的魅力を「売り物」にしないことを強調する。

その一方、ベニグナが「危険因子」を取り除くと称して「変身の決意」をする」とて、女性がその性的魅力を変身によって排除しなければ、男性に「買い物の対象」とみなされてしまつ」と示す。ベニグナは社会での「経験の輪ができるだけ広げる」過程で、仕事を変えるたびに外見を変へ、別の人格を演じる。「私はたくさんの外見をもち、たくさんの衣装をもつね……」こゝでも仕事を得られるようによく商売を学び、地球上のどいへでも行くわ」と彼女は言つ。ギルマンは、次つゞく変身して世間を渡るベニグナをとおして、女性が社会で奉仕するためには、「コンフィデンス・ワーマンのように変身して社会をたまななければ生き残れない」皮肉を示す。

ベニグナの物語は、彼女が「まさに私の好きなタイプ」と呼ぶ男性との結婚を示唆して終る。十九世紀近く読まれた女性小説同様のハッピー・エンディングである。だが、二十世紀を生きる「新しい女」ことへの結婚は夫に「所有される」ことと引き替へて、生活保障を得る十九世紀のヒロインとはまったく異なつた意味をもつ。ベニグナにとって結婚は、愛する人に出会つた結果として、起るかもしぬないことであり、人生の目的ではない。

彼女は家族と離れて自活の道を探るにあたつて、七十歳に達した自分を想定して人生設計を立てるが、その計画に結婚は入つていない。健康、金、家、友人などを人生に不可欠なものとしてあげながら、家族については、計画するものではないといつ考へ方を示す。「結婚しない女性は確実な割合で存在するのに、若し女性たちが結婚しないことを想定して人生計画を立てない」とがおかしい」と主張し、「そういう機会があれば結婚する」という姿勢

を貫く。

ギルマンは、ベーニーが経済的に自立してから、「生活のために間違った男性と結婚する」危険がないことを強調する。ベーニーの将来に予想されるのは、その子供が「コンフィデンス・ワーマン」になりなくてもよい家庭を築くことである。ギルマンは、物語の最後でベーニーが築く家庭のあり方を示唆する。ベーニーが好きになる男性は、スコットランドからやってきた従兄で、ホーム・マックアヴォードの娘であるが、彼女は「マックアヴォードを召喚し続けることができるとは思っていなかった」と語る。されば、結婚しても、ベーニーが本来の自分を変えることなく、「隠れ」とともなく、「ホーム」を築くことを可能としている。かつて、「結婚しては、ベーニー・マキャウエリーではござらね」と言つて、ベーニーが間違った結婚をしなかったことを意味するが、本書に於けるこの発言が重みをもつ。

若しく「普通の」女性のための文学

『ベーニー』は、少女が大人へと成長する過程でその密かな思いを次第に達成する痛快な世直し小説である。その痛快さは、彼女が読者にだけに本心を打ち明けながら、権力をもつ大人たちまでも思つておらずに機知ために、いつそ増幅される。父親が権力をふるつ家庭に生まれた彼女が「革命」を挑み、「不正をただす」ことを考えるべし、彼女はスーパーワーマンのよつた印象を与える。だが、ギルマンの意図せば、ベーニーをあくまで「普通の女性」として描いていたと思われる。ベーニー

ナ自身が、自分の教育を「普通」と書き記してゐるよつて、彼女は、女子高等教育が著しい発展を遂げた時代にあっても、さしたる学校教育を受けていない。天賦の才に恵まれてゐるわけでも、特權が与えられてゐるわけでもない、平均的な少女である。ギルマンが曰謫るだのは、「のよひなじい」でもある少女がいかに「新しい女」にならかを、「普通の女の子」の読者に示す」とであつたと考へられる。

ギルマンがベーネガをとおして「新しい女」のマーケットを示すとした裏には、当時の文学に対する深い不満がある。「男性中心の文化」の第五回連載「男性の文學」(『フオアランナ』一九一〇年三四四号)においてギルマンは、「男性中心の文化のもとで、小説は、女性の人生の姿を描いてこなかつた」と主張する。「もし小説がよいものであれば、人生を簡単に、すばやく、正しく教へる」ことができる、と、小説の有用性を強調する一方、若く女性がワンバターンの小説を読み取れてゐる現実を指摘する。出版されてゐる小説の九十ページントが、恋愛小説である現実である。

「文学が芸術のなかでやつとも強力で必要なものであり、小説が文学のなかでやつとも重要な形式である」と信じるギルマンは、「ひと田懶れから結婚まで、戀ばかりを描き…その後、幸せに暮りしました」で終る小説である。ふれる当時の状況を憂いてゐる。そのような小説は、ギルマンによれば、「女性を追いかける男性の冒險物語である。『戀の物語』は、男性が女性を愛する物語」であり、そこには「女性の人生の『かなる姿も描きだされていい』ところのが、ギルマンの主張であり、嘆きである。『ベニグナ』は、「男性化した文學を世の中に送りだし続けっていた」当時の出版界におけるギルマンの挑戦でもある。

その一方、ギルマンは、当時の雑誌ブームを巧みに利用して『ベニグナ』を書いたとも見える。ギルマンが『フ

「オアランナー」を出版していた二十世紀初頭のアメリカでは、一家庭に四冊の割合で雑誌が講読され、「その数も続く二十年のあいだに劇的に増え続けていた」（ホーリー 119）。とくに女性雑誌は爆発的な人気をおさめ、その人気は中流階級女性の社会進出とともに高くなり、その動きに支えられたところ分析もされている（ウッズ 111）。

その反面、内容は依然として結婚と家庭を強調する傾向にあり、一九一〇年に女性が参政権を獲得した後でも、多くの記事がフューリーズムを攻撃し、ファッショーや室内装飾が主流であった（ホーリー 4）。社説は女性の商業界への参入を抑制するより忠告し、広告は家事を簡単にする利器を宣伝する傾向にあった（同）。このような現象は、「ギブソン・ガール」などによつて「新しい女」のイメージが拡散されても、それが現実に浸透するまでは時間が必要であることを証明していると言える。

だが、各誌が敏腕編集長を雇つて力を入れて書いた小説には、記事や社説などとは表れない変化がみられ、「新しい女」も登場しつつあった（ホーリー 4）。家父長制への反意を明白に表し、社会で仕事をすることによって自己実現を願い、男性からの独立を達成しようとする女性が描かれ始めていたのである。レインは、『フォアランナ』の短編が、そのスタイルや簡潔さなど、当時の女性雑誌の手法で書かれていたことを指摘している（199）。ベニグナのような新しい女性を自分の雑誌に登場させ、平易なスタイルで描いたことは、ギルマンが、人気の女性雑誌に表れた新しい傾向をすばやく汲み取った結果、あるいは先取りした結果とも見える。

ベニグナを「普通の女の子」から「新しい女」に成長せることで、女性の人生を描こうとしたギルマンは、彼女に「普通」とは言ひ難い能力を持つとしている。手近にある物語本や雑誌から学ぶ能力である。「実人生よりも遙かに広範囲の人生を本で知ることで私たちは成長するべきだ」と主張していたギルマンは、ベニグナにその主張

を実践させてこな。

彼女は、ギルマンが新しい考え方を啓蒙する目的で出版した雑誌『フォアーリンナー』に登場するキャラクターにふわわしく、本や雑誌などを読むことによって、新しい知識や技術を習得する。そのような知識や技術は、彼女の新しい生き方を支える「秘密兵器」の重要な部分を形成する。トム・ソーヤーのように、本を読むことで「子どもらしい非現実の世界にどりわれることも、ハックのように本に不信を抱くことなく、ベニグナは、ギルマンが「男が作った世界」と呼ぶ家父長制社会で、自らの人生を探しだすガイドとして出版物を使つてこな。

ベニグナは、本や雑誌なくしては、「ノンフィクション・ウォーマン」としての存在価値を失つ。彼女は小説や物語を読むことで、「善き悪人」という「ソンフイテンス・ウォーマン」としての姿勢を確立するばかりでなく、そのような印刷物の助けを借りて、人を操る方法を考えだし、人生の困難から脱出する方法を思つづく。「頭のよ」善人」こそ、自分の思いを達成してかつ生き残る方法だと悟るのは、幼い心からの多読の賜である。「本といつ本で悪人が最後に頓挫する」ことに対する、彼女は、悪人たちが読書もせず、読書から学ぶことがないのか、と説く。「善に悪人」になつて生き残り、「耐えて、諦める」だけの善人を助ける決意をするのは、「小説や物語をからたくさん」とを学んだ結果である。そのよつな人は、「大好きな本のどれをじつてもみつかることができない」といふ。それが、その自由性に意氣を感じる結果でもある。

「新しい女」の模範を示す詐欺師 ギルマン『ベニグナ・マキャヴェリ』

ベニグナの「ソンフイテンス・ゲーム」は、読書によつてその存在を確立している詐欺師にふわわしく、読書によつて得た知識によつて稼働する。姉の駆け落ちを阻止する際にも、ベニグナは、「駆け落ちはじつての本をたくわえて、読んでいるので、野性的だが、実直で命がけの恋人と、下心ある悪党との区別ができる」と言つ。『読書して罪を

得る「姿勢はたえず貫かれ、彼女は姉に嫉妬心を抱かせて、駆け落ちを断念せしむにあたつても、「嫉妬心」について本で学んだことが効果を發揮する。父親に詐欺をしかけるときも、その読書の範囲は、父親の興味にしだがつてスコットランド文学から機械工学や電気工学などにも及ぶ。そのような読書によって得た知識が、父親との友好関係を築く鍵になり、彼を操る原動力になる」とは、すでに述べたとおりである。

ベニグナが、本を読むことで、人生を歩む「力」となる知識を獲得し、人生に「変化をもたらす」「コンフィデンス・ウーマンとしての姿勢を確立する」とは、本がさもありまな情報を伝えるものであれば、さほど新しいことではない。だが、ベニグナの読書は、雑誌を発行することで自分の斬新な考え方を啓蒙しようとしたギルマンの意図を強く反映して、きわめて田新しい部分も含んでいる。ベニグナは、「新しい女」になるべく奮闘するなかで、思想や知識だけでなく、ダンスやスポーツなどの実技や訓練をともなうものまで読書によって開拓していく。

ベニグナは、妙齢に達した娘に「礼儀正しさ」を要求する母親に背いて、身体的にも強くありたいと願つ。ギルマンは、女性の健康に人一倍关心を示し（アレン、1911）、「不自然な母親」（『フォアランナー』一九一六年十一月号）などでもその重要性を説いている。ベニグナには、ギルマンのこの関心が強く投影されているが、問題はその方法論である。ベニグナは、身体を鍛えるための体操についても、本でその知識を得て、ひとり屋根裏部屋で挑んでくる。ダンスについても同様であり、彼女は読書によってダンスのステップを学び、屋根裏部屋で密かにダンスする楽しみを味わつてゐる。

ベニグナは、「やつたこと思つてはゐる」と云つて主義を貫き、柔術やフロントランgingも習つたこと言つが、ギルマンせりのよつたなベニグナを描くこと、本や雑誌のもつ可説性を示す。ベニグナのよつてあれば、町

「行かなくてもダンスを楽しむ」とができる、学校に行かなくても、あらゆることを独学で学ぶことができるところが可^リ能性である。ギルマンは、ベニグナの「読書学習法」をおもじり、都市から遠く離れたところに住んでいた人でも、郵便で届けられる安い読物で、なんでも学べるところの可能性を示してくる。因みに、『フォアワレンナー』は、スタンダード販売はされず、契約講読者に郵送されるが、政治団体などをとおして購入・配布されるシステムをとつ、年間購読料は一ドルであった（セブレア一八八八九）。

ギルマンは、読書によつていかに知識を得るか、といつ具体的な方法をも指南していく。ベニグナは、祖父の農場運営を改革するが、その改革も、読書によつて模範的な酪農について学ぶことで達成する。当時の作家エドワード・H・ウーレット・ヘイルによる言葉を引用し、集中した読書で専門知識だけでなく得られる」とを実証する。「もし一つのテーマについてひと冬かけて読書すれば、偉大なる専門家を除けば、他の誰よりこのことについて知る上手ができる」と。

ベニグナはやがて、「どのよひに必要な知識に辿り着くことができるか、といつ具体的な手順についてせき書き立てる。『最新版の百科事典で概略をつかみ、そこに挙げられてくる参考文献に何冊かあたつ……専門雑誌の最新論文を得る……もし最重要ボイントの選び方がわかれば、一冊一冊かかってかかることを学ぶ」とある。概略から詳細へと知識を深める方法を教示する。ベニグナは、図書館の図書についての方法を習つたと聞こ、学校で「」のようなことを教えるべきだと主張している。

読書による独学で成長するロインを描く文学は、このよひな「変化をもたらす」ためのメッセージが満載され、教訓的になりがちである。『ベニグナ』は、たしかに、「新しい女」になるための具体的な手順や教訓にあふれ、マ

「コアル本の性格をそなえて」いる。『フオアランナー』の宣伝文で、ギルマンがその田的の一つに「実際的な提案や解決策を提供する」と、を掲げてはいることからすれば、掲載された小説が、そのよつた具体的な情報を盛込込んでいることは当然ではある。だが、ギルマンはマーコアル本のよつた堅苦しさを打ち消す工夫を施すことと、読者が楽しみながら、「実人生よりも遙かに広範囲の人生」を知ることができるように配慮している。広範囲の人生を知ることで、読者が社会環境を作り変える第一歩を踏みだすことを提案している。

教訓的な堅苦しさを打ち消すためにギルマンが施した最大の工夫は、ベーヴナを「コンフィデンス・ワーマン」としてそのゲームをヨーモアあふれるものにしたことである。周囲の大人们には「ただの女の子」にしか過ぎないベーヴナが、自らの才覚のみを頼りに、父親をはじめとする大人の権力者の裏をかくことと、読者は「胸のすべ思」を感じる。ベーブナ自身、密かに人を操り、現実を変えることを「世界を征服する」と呼んではいるが、読者はその面白さを共有する」といなる。ベーブナが読者にその密かな思つを自由に綿々と語り、コンフィデンス・ワーマンの奥の手を見せためである。

彼女の最大の目的は、か弱き善人を助けることであるが、彼女自身が非現実的な「正義の味方」ではない」とも、面白さを倍加させる結果となる。たとえば、迷惑な下宿人を追に出すときのように、悪人にも負けない悪知恵をもつて問題解決にあたることだが、ヨーモアを生む。ヨーモアは細部にもあふれ、子どもらしく虚榮心を満足させる言動や、ジョンダーに入れる心身の強さを鍛える場面など、至るところに用意されてはいる。ベーブナは、十九世紀の自己犠牲的な少女とは異なることを直面し、社会環境を変えることを血の「面白さ」と感じて実行する」と、読者の共感を呼び込む。

ギルマンは血肉において、なぜ書くか、を血肉の言葉で述べてゐる。『フォアランナー』創刊に至るこきわつを語りながら、彼女は自分の作家としてスタンスを明らかにする。「力量のある人口の作家」でもなく、「芸術家」として「芸術性を追求する作家でも、「生計を立てるために編集者の賣ふものを書く「作家でもない」と血肉を定義する。そのうえで、自分が書く目的は、「大切だが、まだ広く知られていない重要な真理を表現する」とあると云ふ。

この發言を『ベニグナ』の内容に照らし合わせて考へると、ギルマンがこの小説を書くことで血縁など」とがより明確になる。「男性中心の文化」のなかで、少女がいかに人権を守つて独立を達成するか、なぜ家族の人間関係を矯正するか、その理由と具体的な方法」」そが、ギルマンがとくに若い女性に向けて発信した「重要な真理」である。『フォアランナー』に掲載されたエッセイは、その「重要な真理」を自分の言葉で直裁に論じ、短編は、その「真理」の断片を理屈抜きの人生に照らして一つ一つ解決策をもつて描く(フィッシュ・ショキン、一三二六)。連載小説としての『ベニグナ』は、一人の少女の「新しい女」への成長を、興味を誘つヒンズーで繋いで描くことで、ギルマンが伝えたい「真理」を総合的に提示して云ふ。

『フォアランナー』の宣伝文でギルマンが「世の中の正しい場所にいる男性 計り知れない力をもつ女性 もつとも大切な市民としての子どもについて論議する」と述べて云ふ。『ベニグナ』は、これら三つのテーマを、ヒロインの「革命」を描く過程ですべて網羅していく。『ベニグナ』には、ヒロインの性格はもとより、母親の性格わらには、教室内のヒビンードなど、ギルマンの血肉的要素があく盛込まれて云ふ(ブレイク、六)。ギルマンは、自らの経験をも盛込みながら、小説の形式を用いて、若く女性読者に「面白く」「新しい女」の模範を示したので

ある。

血肉によれば、ギルマンは『フオアーランナー』に掲載する年間本四甲分に匹敵する分量を書きながら、その赤字を埋めるために、わざと執筆や講演をしなければならなかつたところ。それでも、ギルマンが七年にわたつて発刊し続けたのは、十ドルの欄子を賣つてひと仕事と感じた女性が、年間一ドルの『フオアーランナー』を講読する上じを「不自然」だと感じる状況、あるいは批評家たちもその出版を無視する状況を変えたこと願つたからに違はない。

「自分は小説家ではない」とが眞田に詰問された」とギルマンは嘆きながら『フオアーランナー』に掲載した小説を指して述べてゐる。だが、『ベーヴー』は、ギルマンが描いたとおり、「男性化された文部」が席巻する時代において、女性の人生の真の姿を描いた小説であり、作者のメッセージは、百年近く時を経た現代の若く読者にも十分通じる威力をもつてゐる。それは、ギルマンが正真正銘の『フオアーランナー』であった証拠でもある。

注

本稿は、拙稿 "An 'Unnatural' Daughter's Revolution: Benigna Machiavelli as a Confidence Woman"（『新しこな現象』）のロッパー、アメツカ、日本など、世界的規模で歴史同時期に起きてゐる（ペロー、丘、属形一、笠間一）や、のよひながら、キルマンの著性は、ロッパーが日本でこか早く紹介されてゐる。キルマンは血肉が血肉で送へられてゐるが、『フオアーランナー』は、ロッパーだけではなく、イングリッシュ・オーストリアなどでも讀まれたところ。日本における『フオアーランナー』は、日本女性の大卒業生

大多和だけ・小山順子・小山順子らが『女性と経済学』の翻訳に挑み 初版から数えて二年後の一九一一年(明治四四年)には『婦人と経済』として出版してござります。

引用部分の日本語訳は、すべて拙訳。

"Clash of Cultures in the 1910s and 1920s" - Jean Matthews, Carroll Smith-Rosenberg

女性の職業進出を男性との比率でみると、『聖職 法律 建築 医学 写真 教職 看護 歯学 編集 報道』については、一八七〇年には、一八八〇年には、「事務六・四八・セント、一九〇〇年には、一〇八・セント、一九一〇年には、一三・三パーセント」と増えてくる(トモハバ ハ)。『販売 速記 タイプ 簿記 レジ 会計など』については、一八七〇年には、〇・八パーセント、一九〇〇年には、一五・六パーセントとよりこゝそろの増加を示してくる(ハ)。

十九世紀後半に設立された女子大学の代表的なものとして、ヴァンサン（一八六五年）、スミス（一八七五年）、ウェルズリー（一八七五年）、プリン・マー（一八八四年）などがあげられる。これらの女子大学は、ハーヴィードやイエールなど男子エリート大学に対抗するカリキュラムをそなえていた。

『フォアランナー』創刊に至る経緯は、ギルマンの自伝に詳しく述べられる。

当時の女性雑誌に掲載された「新しい女」の短編については、モーリーン・ホーイー編集の作品集を参照。

引用文献

Allen, Polly Wynn. *Building Domestic Liberty: Charlotte Perkins Gilman's Architectural Feminism*. Amherst: U of Massachusetts P, 1988.

Ammons, Elizabeth. "The New Woman as Cultural and Social Reality: Six Women Writers Perspectives." Heller and Kudnick 81-97.

Blake, Joan. Introduction. Gilman, *Benigna Machiavelli* 5-8.

- Ceplair, Larry, ed. *Charlotte Perkins Gilman: A Nonfiction Reader*. New York: Columbia UP, 1991.
- "Clash of Cultures in the 1910s and 1920s." 1 November, 2003. <www.history.ohiostate.edu/projects/clash/NewWoman/newwomen-page1.htm>
- Cott, Nancy F. *The Grounding of Modern Feminism*. New Haven: Yale UP, 1987.
- Evans, Sara M. *Born for Liberty: A History of Women in America*. 1989. New York: Free P, 1997.
- Fishkin, Shelley Fisher. "'Making a Change': Strategies of Subversion in Gilman's Journalism and Short Fiction." *Critical Essays on Charlotte Perkins Gilman*. Ed. Joan B. Karpinski. New York: G.K.Hall, 1992. 234-48.
- Gilman, Charlotte Perkins. *Benigna Machiavelli*. 1914. Santa Barbara: Bandanna, 1994.
- . *The Charlotte Perkins Reader*. Ed. Ann J. Lane. Charlottesville: UP of Virginia, 1980.
- . *The Forerunner: A Monthly Magazine*. Vol.1 (November 1909-December 1910). MacLean, VA: IndyPublish.com, n.d.
- . *Concerning Children*. 1900. Walnut Creek, CA: AltaMira P, 2003.
- . *Herland*. 1915. New York: Pantheon, 1979.
- . *The Living of Charlotte Perkins Gilman: An Autobiography*. 1935. Madison: U of Wisconsin P, 1990.
- . *The Man-Made World*. 1914. Amherst, NY: Humanity, 2001.
- . *What Diantha Did*. 1912. MacLean, VA: IndyPublish.com, 2003.
- . *Women and Economics: A Study of the Economic Relation Between Men and Women as a Factor in Social Evolution*. 1898. Mineola, NY: Dover, 1998.
- Heller, Adele, and Lois Rudnick, eds. 1915. *The Cultural Moment: The New Politics, the New Woman, the New Psychology, the New Art, and the New Theatre in America*. New Brunswick: Rutgers UP, 1991.
- Hill, Mary A. Introduction. *The Man-Made World* 7-20.

Honey, Maureen. *Breaking the Ties that Bind: Popular Stories of the New Woman, 1915-1930*. Norman: U of Oklahoma P, 1992.

新妻十代「アーハ ハル—ホーリー カトリック ハル 聖母マリヤ ハリハラ」
伊・カバセイヘン『新妻三大聖人』新装版 朝日新聞社 2001. 1-54.

Kuhlmann, Susan. *Knife, Fool, and Genius: The Confidence-Man as He Appears in Nineteenth-Century American Fiction*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1973.

Lane, Ann J. <1> "The Fictional World of Charlotte Perkins Gilman." *The Charlotte Perkins Gilman Reader* xv-xlvii.

---. <2> *To Herland Beyond: The Life and Works of Charlotte Perkins Gilman*. New York: Pantheon, 1990.

Matthews, Jean. *The Rise of the New Woman: The Women's Movement in America, 1875-1930*. Chicago: Ivan R. Dee, 2003.

脚注題
『ハリハラ』 オックスフォード・ワゴン ビヨンヌハルの本「新妻」 31 October, 2003. <www.jk.sk.jp/j/key/200301.htm>

Perrot, Michelle "The New Eve and Old Adam: Change in French Women's Condition at the Turn of the Century." *Behind the Lines: Gender and the Two World Wars*. Ed. Margaret Randolph Higemet, et. al. New Haven: Yale UP, 1987. 51-60.

Rich, Adrienne. "Compulsory Heterosexuality and Lesbian Existence." *Signs: Journal of Women in Culture and Society* 5 (1980):631-60.

Rudnick, Lois. "The New Woman." *Heller and Rudnick* 69-81.

脚注題
『ハリハラ』『新妻』 138(1992)41-43.

Scharnhorst, Gary. *Charlotte Perkins Gilman*. Boston: Twayne, 1985.

Smith-Rosenberg, Carroll. *Disorderly Conduct: Visions of Gender in Victorian America*. New York: Oxford UP, 1985.
Yamaguchi, Yoshiko. <1> "The Stranger Motif in *Adventures of Huckleberry Finn*." *Journal of Yamashashi Eiwa College* 21 (1988):70-91.

- ...<2> "An 'Unnatural' Daughter's Revolution: Benigna Machiavelli as a Confidence Woman." *Bulletin of The Institute for Research in Language and Culture, Tsuda College* 18 (2003): 5-14.
- Wood, James P. *Magazines in the United States*. New York: Ronald P, 1971.